
Crystal Story 前編

ハルシオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r y s t a l S t o r y 前編

【Nコード】

N 7 4 9 3 A

【作者名】

ハルシオン

【あらすじ】

クリスタルを巡る壮大な戦いが今始まる。

第1話・始まり

俺は最近同じ夢を見る。

赤い透明な石が俺に対して

「旅立ちなさい」

と言う。あまりにも不気味だから父さんとかに話しをしても

「きにするな」

で終わってしまう。

だが今思えばこれが俺の壮大な旅の始まりだった。

——ライラックの村——

「ふあゝ、よく寝た」

セルツはベットから起き上がり寝癖のついた頭をかきながら時計に目をやった。

「げっ！！もう昼かよ！寝過ぎた」

セルツは急いで服を着替えリビングへと向かった。リビングには父さんがコーヒーをすすりながら新聞を読んでいた。

「やっと起きたかねぼすけ！」

「おはよ、父さん」

朝の？挨拶をしセルツはキッチンへと向かった。

キッチンには朝作ったセルツの朝食がまだ残っていた。

セルツはそれを手にとり

再びリビングへと戻った。すると父の横に一つの剣が置いてあるのにセルツは気付いた。

「父さんその剣なに？」

セルツは朝食を口にしながら父に聞いた。「これか？今日はお前の18歳の誕生日だろ？そのプレゼントだ」

セルツは毎日学校があつたためすっかり今日が自分の誕生日だという事を忘れていた。

「マジ！？ありがとう！」

セルツは渡された剣を手にした。

その剣の真ん中には綺麗な赤い宝石が埋め込まれており、刃も綺麗に仕上がっており高級感が漂っている。すると父が

「夜…話があるからな」

と言い部屋へ行ってしまった。

父の後ろ姿には

どこか寂しさがあつたようにセルツは見えた。

第2話・事実

―その日の夜―

セルツは時計に目をやる。時計の短針は9、そして長針は12をさしていた。

「おし、時間だ」

と言いセルツは部屋をでてリビングへと向かった。リビングには父と母が椅子に座っていた。だがリビングは重い空気に包まれている。セルツは嫌な予感がした。

「来たか。まあ座れ」

父がそう言い、セルツは言われた通り椅子に腰をかけた。

「セルツ…この家を出ていけ」

父の突然の言葉にセルツはビックリした。

「はっ！？なんでだよ！！俺なにかしたか！？」

「お前…最近同じ夢を見ると言ってたよな…」

「ああ。赤い透明の石が喋る夢だ」

「それは火のクリスタルだ。お前の夢に現れると言う事はクリスタルになんらかの危険が迫っていると言う事だ」

「はっ！？もしそうだとってもなんで俺が家を出ていかなきゃいけないんだよ！！」

「お前には言ってなかったがうちは代々クリスタルを守っていかなくゃいけないんだ。そしてクリスタルの守護者はクリスタル自身が決める」

「と言う事は…その守護者ってのは俺が選ばれたのか…？」

セルツの言葉に父が頷いた。

「セルツ…火のクリスタルに危険が迫っていると言う事は他の三つも危険と言つ事よ」

ずっと黙っていた母が口を開いた。

「すると俺の他にまだあと三人いるって事か!？」

「ええ、そうよ」

セルツは黙る。

それと同時に父が椅子から立ち上がり

「とにかく明日には問答無用で家を出てもらうつ…今のうちに準備しとけ…」

と言い残し父は部屋へと向かった。

その後を追うように母も部屋へと向かった。

リビングに取り残されたセルツはなにかを考えている。

そして数十分後
リビングを出て部屋へと戻っていった。

第3話・旅立ち

―次の日の朝―

父はベットから起き上がりいつも通り服を着替えリビングへと向かった。

テーブルの上には

一枚の手紙が置いてあった。父は手紙を手にとり目をとおす。

《父さん、俺旅にでるよ。世界にいるクリスタルの守護者に会ってくる。これが俺の運命…なんだよな。まあクリスタルの危険の原因を解決させたら戻ってくるよ。そしたら旅の話をいっぱいきかせてやるよ！楽しみに待ってるよ父さん！あと、母さんを大事にな》

「けっ…いっちょ前な事言いやがって…」

そう言う父の目から涙が流れこぼれていた。

―ライラック村周辺―

「さて…最初にどこに向かえばいいんだか…」

セルツは村を出てすぐに息詰まっていた。
セルツは道具袋から地図を取り出した。

「ん…とりあえずここから北にある洞窟を抜けてアリーナの町にいくか」

地図をしまい
再び歩き始めた。

歩き始めてからどのくらい時間がたっただろうか…

セルツの目の前に魔物が現れた。

「スライム二匹か…全然余裕だぜ！」

セルツは父からもらった剣を手にしスライムに立ち向かっていった。それと同時にスライムは左右に別れる。セルツは素早く右へ行ったスライムを追い、きりつけた。スライムは一撃でその場に倒れ立ち上がらなくなった。

セルツは手を休めずに後ろを振り返りもう一匹のスライムに向かって行く。

だがスライムはセルツに勝てないとわかったのかその場から逃げた。

「ふん。スライムが俺に勝てるとでも思ってたのか!？」

セルツはスライムから薬草を戦利品として一個奪い取り洞窟へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7493a/>

Crystal Story 前編

2010年12月4日14時51分発行